

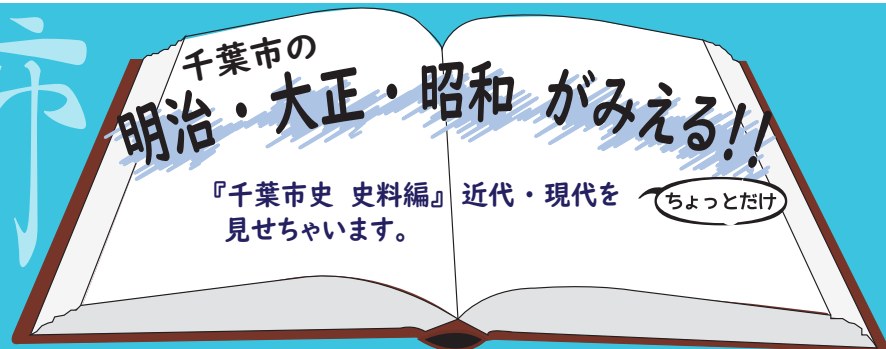


編さん便り

千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!
第13回 千葉市から大千葉市へ……1 - 3
千葉市立郷土博物館は
どうしてお城のかたち?……4

Chiba-shishi News Letter NO.33 2024.9

大千葉市



連載中の「千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!」
第13回は、千葉市史編集委員の神山知徳先生に「千葉市から大千葉市へ～市制をめぐる2つの祝賀会とその時代～」をご執筆いただきました(2～3頁)。

大正10年(1921)の市制施行を記念した祝賀会から16年後の昭和12年(1937)、市域を4倍に拡大して「大千葉市」となったことを祝う記念式典がひらかれました。このあとも、千葉市は数度の周辺町村との合併や海面埋立てを行い、最終的には市制施行当初のおよそ18倍もの面積を有することになります。その拡大の第一歩となったのが、今回取り上げた昭和12年の合併です。

周辺町村との合併は、必ずしも順調に進んだわけではありません。2度の祝賀会開催を基点として、千葉市が「大千葉市」となった背景をわかりやすく解説してくださっています。

現在の千葉市域がなぜここまで広域で、現在の各行政区がそれぞれ個別の特色をもつことになったのか？

その解のひとつは、合併についての昭和初期の国や県内他町村の動き、首都東京との関係、そして千葉市近隣地域との関係を見ることで明らかになるでしょう。

現在の千葉市域の明治末期から大正・昭和戦前・戦中期のようすを具体的に示す史料426点を収録した『千葉市史 史料編 近代2』は、千葉市立郷土博物館で購入できます。B5判、3,000円(税込)。



お宅にのこるその資料、
捨てないで!!



古い書付や写真、民具類など、台風などの自然災害やそのほかの事情により濡れてしまったり、汚れてしまった資料がありましたら、その対応のお手伝いできればと思います。

これらを捨ててしまう前に、可能であれば、**市史編さん担当**(連絡先は4頁参照)までご一報ください。お宅に残る歴史や思い出を、少しでもよい形で後世に残していけるよう、できる限りのお手伝いをさせていただきます。

第13回 千葉市から大千葉市へ～市制をめぐる2つの祝賀会とその時代～

千葉市史編集委員 神山 知徳

大正10年(1921)5月22日、県庁前の公園で、千葉市の市制施行祝賀会が盛大に挙行されました(『千葉市史 史料編11 近代2』掲載史料No.22、23。以下史料No.のみ略記)。**写真1**は、その際に装飾を担当した業者が作成した会場図です。

その16年後の昭和12年(1937)2月11日には、周辺の4町村(検見川町・都賀町・都村・蘇我町)を合併して、一気に市域を4倍に拡張させました。「大千葉市」の誕生です。

かつて市制祝賀会が行われたのと同じ県庁前の公園で、「大千葉市」誕生の祝賀会が開かれました。**写真2**は当時の新聞に掲載された航空写真とその紙面です。この時も先の市制祝賀会とほぼ同じレイアウトで、祝賀会が開かれたことが分かります。

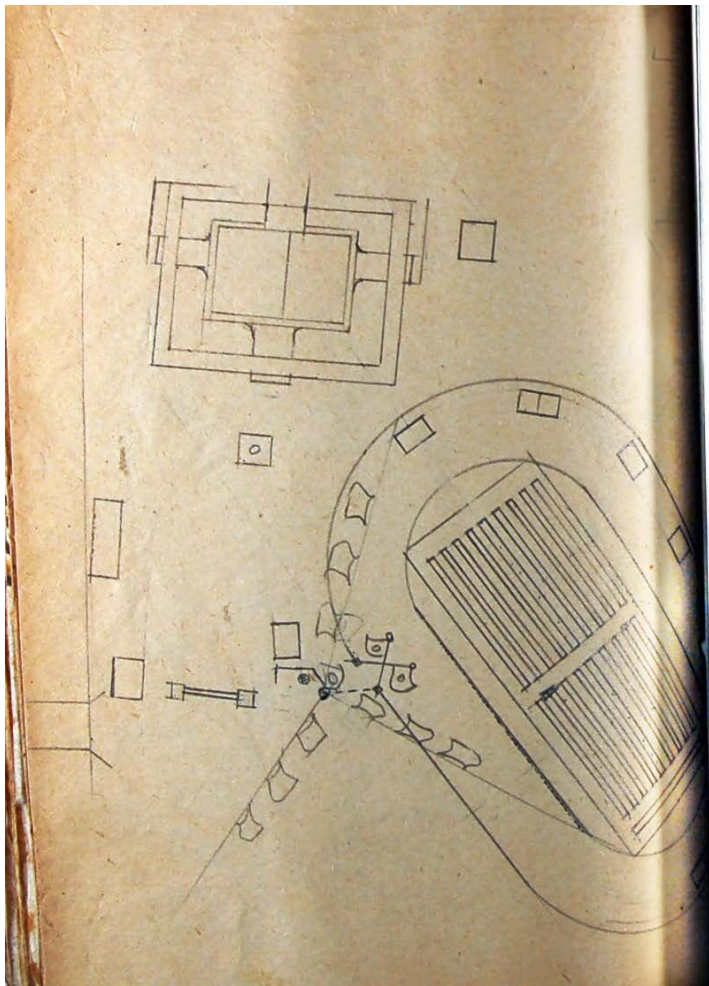


写真1

千葉市総務局所蔵千葉市歴史的公文書 10000-99-99-037「市制施行祝賀式関係綴」より

市制施行に遡ること明治42年(1909)8月には、町会議員や町内有力者を委員とする市制調査会を設置することが決まりました(史料No.1)。翌年3月には、現行の千葉町域に加え、鉄道連隊・陸軍千葉衛戍病院などが置かれた都賀町作草部、千葉監獄署が置かれた都村の貝塚・辺田・矢作、蘇我町の曽我野・今井などの隣接区域をもって市制を施行することを相当とする報告をまとめました。しかし、この案は実現することなく、大正10年の市制施行に際しては、現行の町域のままに市制に移行しました。

では、なぜ大正10年では周辺町村の合併はならず、昭和12年にそれが実現したのでしょうか。それには、都市計画東京地方委員会が昭和7年に東京緑地計画協議会を組織し、新たに地方計画を策定したことが大きく影響しています。これにより、東京駅を中心とする30～40kmの範囲を地方計画区域として設定し、その中を大都市区域、田園郊外区域、工業振興区域、外郊区域に区分し、市街地の連続的膨張を統制しようとした。この年東京市は周辺の郡部町村を合併し、15区から35区へと拡大しました。これを「大東京」といいます。千葉市は、「大東京」を中心とする「大東京」空間(後の首都圏)の工業振興区域に組み込まれていったのです。

ところが、このような地方計画の策定にも関わらず、「大」を冠する都市化を目指す都市間の競争は激しさを増していきました。県内では銚子市が昭和8年に県下2番目の市制施行を実現し、さらに昭和12年には隣接する2か村を合併して市域を拡大しました。これに刺激を受けて、市川市(昭和9年)、船橋市(昭和12年)、館山市(昭和14年)、木更津市(昭和17年)、松戸市(昭和18年)が誕生しました。

このように県内町村が次々と市制施行を果たしていく中で、千葉市も「大東京」空間に連なる確固たる地位を築こうと、いち早く昭和7年には、千葉市のみならず隣接する都賀村と都村の一部区域を都市計画区域に編入しました(史料No.234)。また都市計画地方委員会では、これでは「大千葉市」実現には狭隘に失するから、蘇我町・検見川町稲毛を包含してはどうかという意見も検討されました(『千葉毎日新聞』昭和7年5月22日付)。

これと並行して『房総新聞』は、昭和11年5月から

「大千葉市」建設を謳う一大キャンペーンを張っています。その中で、昭和11年の時点で市制を敷いている市川市・銚子市と比べ行政区域の広さで劣っており、「市民たるの資格に於て羞恥を感じざるを得ない現状」と嘆いています(昭和11年5月13日付「自由論題 大千葉市建設と検見川合併問題」)。

また同紙上のキャンペーンでは、合併の根拠として重要な建造物(「当市発展の唯一対象物」)が隣接町村にあるとたびたび主張しています。その例として何度も挙げられているのが、千葉医科大学(現千葉大学医学部)や鉄道連隊・気球連隊などの軍施設です。鉄道連隊や

気球連隊などは確かに都賀町に置かれていました。興味深いのは千葉医科大学についての記述で、確かに都村には接していますが、明らかに千葉市内にあります。このような錯覚を起こさせるほどに、都村は千葉市の市街地と連続した地域と認識されていました。

また蘇我町は、一部有力者の反対で直前まで合併に難色を示していました(史料No.238)。蘇我町が千葉市への合併を決断した背景については、明治29年に房総鉄道千葉・蘇我間が、明治45年には木更津線(現内房線)蘇我・姉ヶ崎間が開通したことがあると考えられます。この結果鉄道貨物の取扱量が増え、かつ

て東京湾内湾水運業で栄えた蘇我町は、新たな局面を迎えていました。他方、帝都と鉄道で直接結ばれ、「大東京」の工業振興区域となった千葉市の繁栄は、蘇我町にとって無視できないものになっていたのです。千葉市との合併に反対していた蘇我町会の一部議員も、ついに「世論に抗し難し」とみて、合併の意志を示したのは、実に合併直前の1月28日でした。ところが蘇我町の一部地区住民はこれに強く反発し、合併が決定したにも関わらず、100名余りの人々が県庁前で激しく抗議活動を行っていました(『東京日日新聞』千葉版、昭和12年2月6日付)。現在編集作業中の続刊『千葉市史 史料編12 現代1』でも紹介する予定ですが、町村合併には紛擾がつきものなのです。

写真2

千葉県立中央図書館所蔵『読売新聞』千葉読売版、昭和12年2月12日付



千葉市立郷土博物館はどうしてお城のかたち？



千葉市立郷土博物館の天守閣を模した建物、市民のみなさまには馴染み深いものかな、と思います。この独特な形の建物は、いつ、どういった意図で建てられたのかを、『千葉市政だより』の記述から、簡単にご紹介します。

昭和41年6月号の『千葉市政だより』で当時の宮内三朗市長は、次のように述べました。

…私は観光ということをしるすべしなものだと初めは思っていたんですが、近年の傾向はあらゆる階層の人が観光ということに引きつけられて、相当のインテリ階級の方でも団体で旅行したりする。

そこで考えたのが亥鼻山に知事さんと相談して、文化の森として文化会館を作り、博物館、図書館

といったようなものを集める。これから千葉市は洋風の建物でうまってしまうから、こうした緑に囲まれた地域に純日本風な天守閣風な建物がそびえてもいいと思う。郷土博物館として、郷土の資料を集める。あるいはプラネタリウムのような施設を作り、また展望台をつくる。…

宮内市長の言葉の中では「博物館」と当初から想定されていたことがわかりますが、収蔵庫等博物館としての要件を満たすことができなかったこともあってか、まずは観光施設として「千葉市郷土館」がスタートしました。

期待のあらわれか、『千葉市政だより』には3号にわたって記事が掲載されます。昭和42年4月1日発行の第217号一面では「待望の郷土館完成 4月9日」と一報があり、現在は千葉市科学館に移動してしまったプラネタリウムを含む1～5階の内容が書かれています。続く第218号では、桜まつりで賑わうなか行われた開館式について報じられ、「プラネタリウムに人気」が集まっていることが書かれました。5月1日発行の第219号では、館内を写真付きで紹介しています。2階の「写真パネルによる展示風景」にうつる有孔ボードの中には、現在も郷土博物館の展示で活躍してくれているものもありそうです。

そして建設から20年弱経った昭和58年4月1日号の「お知らせコーナー」に「郷土館・加曽利貝塚博物館 名称を変更」という記事が掲載されました。建築中の収蔵庫の完成により博物館の要件を満たし、同年4月1日から「千葉市立郷土博物館」へと名称を変更、晴れて博物館としてのスタートをきりました。

令和6年10月より、千葉市立郷土博物館は常設展示のリニューアルのため、一時休館いたします。予定としては令和7年秋頃に「千葉氏をはじめとする郷土のあゆみと歴史のダイナミックな移り変わりを楽しみながら学べる」博物館へ生まれ変わります。新たな郷土博物館を、どうぞお楽しみに！



『千葉市政だより』第217号（昭和42年4月1日）

ちば市史編さんだより33号をお届けします。連載中の「千葉市の明治・大正・昭和がみえる!!」。本号では、神山編集委員にご執筆いただきました。千葉市が大きくなっていくその発端となる昭和12年の合併以前・以後を、「祝賀会」を題材にご紹介いただきました。今夏は、南海トラフに関連するような地震や、すわ1828年のシーボルト台風匹敵するのではとまでいわれた大きな台風と、さまざまな自然災害が日本列島を襲いました。毎号こうした文言を書く事態を本当に悲しく思いますが、とにかく被害に遭われた方が少しでも早くいつもの日常を取り戻せますよう、心よりお祈り申し上げます。(え)

あとがき

ちば市史編さん便り 33号 Chiba-shishi News Letter No.33

発行日 2024年9月27日
編集・発行 千葉市立郷土博物館 市史編さん担当
〒260-0856 千葉市中央区亥鼻 1-6-1
印刷 株式会社みつわ